

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25年 5月 29日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21320063

研究課題名（和文）フランス文学における歴史記述の総合的研究

研究課題名（英文）Studies on the narrations of the history in the French literature

研究代表者 田口 紀子（TAGUCHI NORIKO）

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：60201604

研究成果の概要（和文）：

フランスにおける、「文学」と「歴史」という二つの隣接ジャンルの美学的、認識論的境界の推移と、具体的文学作品での歴史認識の表出を、17世紀から20世紀までのいくつかの特徴的の局面に注目して検証した。2011年11月には国内外から文学と歴史の専門化を招いて日仏国際シンポジウム「フィクションはどのように歴史を作るか—借用・交換・交差」を京都日仏学館で開催した。その内容を来年度を目途にフランスで出版するべく準備を進めている。

研究成果の概要（英文）：

We examined the evolutions of the esthetic and ethic boundaries of the contiguous domains of history and the literature in France and their representations in literary texts, focusing on characteristic cases from 17th to 20th centuries. Some parts of our studies were made public on the international symposium “How the fiction make history: borrowing, exchange, crossing” held on November 2011 in Kyoto, inviting researchers specialized in French literature and history to have more discussions on the issue. We are preparing to publish the proceedings in France hopefully in 2014.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	5,600,000	1,680,000	7,280,000
2010年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2011年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2012年度	2,800,000	840,000	3,640,000
年度			
総計	14,000,000	4,200,000	18,200,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：フランス文学、歴史叙述、リアリズム、フィクション

1. 研究開始当初の背景

物語(histoire)と歴史(Histoire)とは、語源の同一性が示すように、「物語る」という同一の行為にその起源をおいている。「物語る」行為は、小説の分野においては信憑性をめぐる問題を中心とするフィクション論、ジャンル論と密接に結びついているし、歴史の分野においては、歴史記述は客観的な事実の叙述たりうるのか否かという、ポール・ヴェーヌ、ヘイドン・ホワイトやアーサー・ダントによって提起された歴史哲学の最重要課題と直結する。「語り」の行為は事実をもとにしていようと、架空の出来事を扱っていようと、人為的な編成作用、構造化であることを免れないのであり、その意味で「世界制作」(ネルソン・グッドマン)なのである。

実際フランス文学においては19世紀初頭まで歴史叙述は文学の一分野と見なされ、作家が歴史書を著し、歴史家の著作がその文学性を評価されることが珍しくなかった。

「物語論」については哲学の分野ではポール・リクールの『時間と物語』(1983-85)が最も重要な原理的研究であるが、テキスト分析や歴史的コンテキストの問題は扱われていないため具体的作品が射程に入っていない。

他方文学批評の領域では、ジェラルド・ジュネットが創始したナラトロジー(『フィギュールⅢ』1972)が本格的なテキスト分析に道を開いたが、テキスト中心主義の「いかに語られるか」という形式に重点をおいた批評であろうとするあまりに、「何が語られるか」「なぜそれが語られるか」という作品の意味、ひいては作品の文学性そのものを等閑視したことは否めない。

以上のように、学術領域やジャンルに共通する「物語」の実践を具体的に分析し、そ

の普遍的な有効性を明らかにした研究は本格的には行われていなかった。

2. 研究の目的

本研究は歴史と文学の物語性の問題を、研究分担者のそれぞれの専門領域のテキストについて歴史・社会的状況のもとでとらえなおすことで、フランスにおける歴史学と文学との成立と相互関係というマクロな視点と、その中での個々の文学作品の生成というミクロで具体的な現象から再検討する。具体的には

- (1) 文学と歴史という隣接する二つの学問領域の分化・成立過程を文学史の中で位置づけ
- (2) 文学テキストのフィクション性とは何かという問題と歴史記述はいかにして客観性を獲得しうるか、という歴史哲学の根源的な問題を検討することを念頭に置く。

3. 研究の方法

(1) 「文学」と「歴史」という二つの隣接ジャンルの美学的、あるいは認識論的境界の推移を、17世紀古典主義時代から20世紀までのいくつかの特徴的局面に注目し、哲学的議論や文学批評、著作家自身の創作論などに基づいて検証する。

(2) 次に(1)で取り上げた議論に関連する歴史叙述と文学作品が、どのような物語の方法を採用しているかをテキストレベルにおいて分析する。

最終的に(2)で得られた結果を(1)の理論的パラダイムにおき戻し、「物語」行為の視点から歴史と文学の学問的エチックを歴史的にとらえなおすことで、文学作品の文学性と歴史テキストの真実性との関連を明らか

にする。

4. 研究成果

フランスにおける、「文学」と「歴史」という二つの隣接ジャンルの美学的、認識論的境界の推移と、具体的文学作品での歴史認識の表出を、17世紀から20世紀までのいくつかの特徴的局面に注目して検証した。

17世紀：

17世紀古典主義演劇において古典古代の「歴史」劇がどのように受容され、また新たな作品に再生されたかを、背景の美学的議論を整理しながら、特にラシーヌを中心に考察した。(担当 永盛)

18世紀：

(1) フランス啓蒙思想を牽引した哲学者デイドロや歴史家ギョーム・ド・レナールの著作を中心に、「世界史」の概念の成立過程を検証した。(担当 王寺)

(2) ルソーの「歴史」をめぐるレトリックに注目し、その哲学的意味を明らかにした。(担当 増田)

19世紀：

(1) ネルヴァルを中心とした19世紀前半の文学作品や歴史叙述を「正史」批判としての「記憶の歴史」という観点から分析した。

(担当 辻川慶子(白百合女子大学講師、平成23年より研究分担者))

(2) 世紀初頭のナポレオンをめぐる言説を手がかりに、イスラムを中心とする第お世界のイメージの形成と操作のための文体的戦略を検証した。(担当 杉本)

(3) 19世紀前半の歴史小説の流行に焦点を当て、この「歴史」と「文学」の接近と離反をもたらした新興ジャンルが、事実の演劇的再現(ミメシス)の手法に多くを負っていたこと、その意味で後の三人称小説を準備したことを明らかにした。(担当 田口)

20世紀：

(1) ドレフュス事件と第一次世界大戦という歴史的イベントがプルーストの代表作『失われた時を求めて』においてどのように表象されているかを検証し、作品の同時代史としての側面を明らかにした。(担当 吉川)

(2) フランス社会・思想史の中で、「物語」の概念がどのように利用されたかを、フーコーの社会制度論を中心に検討した。(担当 多賀)

以上の研究についての分担者による報告とメンバーによる討論会を公開で行ったほか、アントワヌ・コンパニオンシ氏(コレージュ・ド・フランス)やマリ・レカ=ツィオミス氏(パリ西ナンテール・ラ・デファンス大学)など海外から著名な研究者を招き、関係が深いテーマについて公開講演会を数多く開催した。

また、平成23年11月18-20日に、「フィクションはどのように歴史を作るか」というタイトルで、研究分担者に加えて国内外からフランス文学やフランス史を専門とする14名の研究者を招聘して、日仏国際シンポジウムを開催した。国内ではこのテーマで行われた初めての国際シンポであり、連日40~50名の専門家の参加を得て、非常に充実した議論が交わされた。個々の発表の内容をまとめ、来年度を目標にフランスでの出版に向けて準備を進めている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① Masuda, Makoto, «Institutions et persuasion dans la pensée politique de Rousseau», in Revue d'Etudes Franco-Coreennes, no 63, 2013, pp. 269-291 (査読なし)

- ② Taguchi, Noriko, “Le “moi” fictif de l’autobiographie: le cas de Benjamin Constant”, in Les Destinataires du moi, Kuwase et ali., Editions Universitaires de Dijon, 2012, pp.161-169 (査読なし)
- ③ Masuda, Makoto, « Argumentation philosophique et mise en scene autobiographique chez Rousseau », in Les Destinataires du moi, Kuwase et ali, Editions Universitaires de Dijon, 2012, pp.65-77 (査読なし)
- ④ Yoshikawa, Kazuyoshi, « Proust et la critique d’art du 19^e siecle », in Proust face a l’heritage du 19^e siecle, Presses Sorbonne-Nouvelle, 2012, pp.133-140 (査読なし)
- ⑤ 永盛克也, « Compte rendu : Beatrice Guion, Du bon usage de l’histoire, Champion, 『仏文研究』, 43 号, 2012, pp. 69-72 (査読なし)

〔学会発表〕 (計 10 件)

- ① Masuda, Makoto, « Nature humaine de autorite : du discours dans la ‘Profession de foi du vicaire Savoyard », Colloque international « Philosophie de Rousseau », 2012.6.9, Lyon, France
- ② Yoshikawa, Kazuyoshi, « Swann, le heros, et leurs doubles », Colloque « Swann, le centenaire », 2012.6.30, Cerisy-la-Salle, France
- ③ 辻川 慶子, 「<若きフランス>と「文学的なもの」の解体: ノディエ、ゴージェ、ネルヴァルを中心に」、日本フランス語フランス文学会秋季大会ワークショップ「『文学的なもの』の身分規定をめぐって」、2012.10.21, 神戸大学
- ④ Taguchi, Noriko, « De la contingence historique a la necessite romanesque : le cas des romans historiques francais des annees 1820 », Colloque « Comment la fiction fait histoire – Emprunts, echange, croisements », 2011.11.19, Kyoto
- ⑤ Yoshikawa, Kazuyoshi, « Proust et la representation de l’histoire contemporaine : l’affaire Dreyfus et la Grande Guerre », Colloque « Comment la fiction fait histoire », 2011.11.20, Kyoto
- ⑥ Masuda, Makoto, « Philosophie et rhetorique de l’histoire chez Jean-Jacques Rousseau », Colloque « Comment la fiction fait histoire »,

2011.11.18, Kyoto

- ⑦ Nagamori, Katsuya, « Histoire et fiction dans la tragedie du 17^e siecle », Colloque « Comment la fiction fait histoire », 2011.11.18, Kyoto
- ⑧ Sugimoto, Yoshihiko, « Temoignages et histoires sur l’expedition d’Egypte de Bonaparte », Colloque « Comment la fiction fait histoire », 2011.11.19, Kyoto
- ⑨ Taga, Shigeru, « La vie comme oeuvre : les cours de Roland Barthes au College de France et l’histoire contemporaine », Colloque « Comment la fiction fait histoire », 2011.11.20, Kyoto
- ⑩ Ohji, Kenta, « La voix qui vient de nulle part : Diderot entre le Supplement au Voyage de Bougainville et l’Histoire des deux Indes », Colloque « Comment la fiction fait histoire », 2011.11.19, Kyoto

〔図書〕 (計 2 件)

- ① Taguchi Noriko et Yoshikawa, Kazuyoshi (eds), Comment la fiction fait histoire : Emprunts, echange, croisements, a paraitre en 2014
- ② 杉本 淑彦, 『大学で学ぶ西洋史<近現代>』 (共編著)、ミネルヴァ書房、2012、403 頁

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称 :
 発明者 :
 権利者 :
 種類 :
 番号 :
 出願年月日 :
 国内外の別 :

○取得状況 (計 0 件)

名称 :
 発明者 :
 権利者 :
 種類 :
 番号 :
 取得年月日 :
 国内外の別 :

〔その他〕なし
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田口 紀子 (TAGUCHI NORIKO)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：60201604

(2) 研究分担者

増田 真 (MASUDA MAKOTO)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：10238909

永盛 克也 (NAGAMORI KATSUYA)
京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：10324716

吉川 一義 (YOSIKAWA KAZUYOSI)
京都大学名誉教授
研究者番号：30119870

杉本 淑彦 (SUGIMOTO YOSHIHIKO)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：30179163

多賀 茂 (TAGA SIGERU)
京都大学・人間・環境学研究科・教授
研究者番号：70236371

王寺 賢太 (OHJI KENTA)
京都大学・人文科学研究所・准教授
研究者番号：90402809

(3) 連携研究者

()

研究者番号：